

# 森羅万象の子

しんらばんしょう

こ

第一章  
虎の子

世界は混沌へと歩み始めていた。人々はあらゆる地で戦を繰り返す、地上へ簡単に火を広げていった。その火はもはや食や住のためのものでなく、人を苦しめ追いやる恐るべきものであった。

水は広がる火に追いつかず、大地は削られ、木々や金属は武器に変えられた。命はもてあそばされて、幼い子の命までも摘まれるような荒々しさであった。

第一章 虎の子  
闇が広がったと言わなければならないのか。それならば、光はどこへ行った。

かくしゃく  
ろうかい  
嬰鑠に背のぴんと伸びた老獺が一人、馬に乗って世界を渡っていた。光を求め、世界を再び平和へと導くために。

森羅万象の子  
かつて世界を巡っていた老獺は、荒廃した世界を後世に残すことを恥と考えていた。こ

の世を生きた者として、それは忍びないと。だから夕暮れが闇を呼び寄せ、太陽をとどめる方法を探さなくてはならないのだ。だが夜は必ず訪れる。

闇の広がる森で野宿するのに不安を抱きながら、老獺は馬を降りた。馬の毛並みはこれだけ歩いたにも関わらずつるりとしていた。この世で二頭と名馬だと彼は信じて数年経つ。

夜の森のざわめきは、何かの唸り声のような、肌を逆撫でる風を呼び込む。それにぶるりとひとつ震えて、老獺は集めた頼りない小枝の薪に火をつけ、小さな暖を取った。

馬がひと声大きく息を吐きだした。揺らめく炎に照らされたその馬の毛並みは、ささやかな光にさえも美しく輝いた。

実は、旅にあてはない。いてもたってもい

られないという理由で、こうして闇雲に動いている。ただ老獺の懐ふところにしまわれた大切な石が、一つの手掛かりと言えようか。黄色の  
ような琥珀色のような不思議な石。それが眺めるたびに何かせねばと老獺をかりたたせる。

第一章 虎の子  
しかし小さな壺に落ちてしまい出口を探す鼠のように、くるくると自分もその行き場がわからず、何も見いだせないままに馬に乗っている。壺の底には、やはり出口はないのだろうか。

革袋から干した米を取り出した。薄っぺらな金属でできた鍋に入れ、貴重な水を浸して火にかける。ほどなくすれば温かい粥が出来上がるはずだ。木の匙さじでかき混ぜながら、貴

重なそれらが焦げぬように願掛けをする。ささやかな祈りだった。

ふつつつと煮えてきたころだった。すうつと空気が冷たくなったかと思うと、何か危険を告げてきた。それは耳からでも目からでもない合図だった。生き物の勘というものか。その勘が、老獺にお前の死に場所は今ここであるぞと告げている。

しかしそのような惑わしに屈するほど、老獺は心までも老いてはいなかった。全ての感覚を石英の破片の鋭い切っ先のように研ぎ澄ませ、生への糸口を探した。老獺と言えど、まだ己の命は見捨ててはいなかった。

遠くにきらりと何か二つ光った。老獺は気付いた。あれは狼の目だ。枯れた老獺の体をも食い千切ろうと、その口に涎を含ませているに違いない。低いなり声が別の方向か

らも聞こえてくる。一頭ではなかった。老獺はまだ匙で粥をかき混ぜていた。もはや焦げなどを気にしているわけではなく、この緊張を狼らに悟られないためだった。ひるむ姿を少しでも見せれば、一瞬で喰われるだろう。やつらの目に負けてはならないのだ。

だが老獺の思惑は虚しく、狼らは一陣の風を合図にこちらへ飛びかかってきた。

老獺は匙を投げた。煮えた粥が飛び、狼の目を熱す。それに一頭は悶え、もう一頭は杖を棒術として振り回し、腹を突いてやった。しかしあと一頭はどうにもならなかった。背後に狼の意気を感じた瞬間に、この旅も終わってしまったと老獺は悟った。

その刹那であった。老獺の目の前に突然大きな獣が飛び出した。猛々しい咆哮と共に跳躍した獣は大虎で、狼へと噛みついた。虎は

一頭ではなかった。もう一頭がすぐにやってきて、雷撃のような咆哮で睨みを利かせる。先程どうにかして一撃二撃を喰らわせた狼らが、弱々しい声で逃げ去った。

そこに王者の貫録を見せるような、堂々とした虎の眼差しがあった。彼らのその月夜に光る眼が、老獺をとらえた。なるほど、この王者にこの身は喰われるのか。老獺はそう悟った。

だがその老獺の構えはすぐに打ち消された。闇夜に、人語が通り抜けてきたのだ。

「爺さん。そんなところで野宿するなんて、喰ってくれと言ってるようなもんだぜ」

虎はおとなしい。木々の間から姿を現したのは、たくましい体躯の青年だった。まるで彫刻のような無駄のない肉付きの体で、小さな革袋を胸に下げている。ズボンには厚手のも

のようだがとところどころが擦り切れ、手作りのような靴も、長い間履いているのかくたくたに見える。そして死んだ兎を一匹片手に下げていた。

だが何よりも目を引いたのが、彼のその髪だった。一点の曇りもない、白。この弱弱しい焚き火にも輝くそれは、老人特有の白さとは明らかに違っていた。

第一章 虎の子  
不意に唸り声が聞こえた。仲間の狼が、まだこちらを睨んでいたのだ。

すると、狼らを殺気ごと跳ね返すように、白い青年はその瞳を鋭くして睨みつけた。

青年の瞳には、まるで獣の眼のような鋭さと荒々しい知性が垣間見られた。賢い獣、そのような表現があてはまるうか。あの眼に睨まれればひとたまりもない。狼は逃げてゆく。尻尾を巻くとはこのことだった。

「怖がらなくていいぜ。こいつら、俺の兄弟なんだ」

微笑を見せて虎たちを見る青年の眼差しは、いつの間にかとても穏やかなものに変わっていた。狼たちを蹴散らした獣の眼が、まるで嘘のようであったようだ。

しかし次に、彼は眉をひそめた。それを合図に青年を凝視しすぎていたことに気づいた老獺は、両拳を突き合わせて頭を垂れた。「かたじけない。こんな老いぼれを助けてくれて、感謝いたす」

母国の慣例でうやうやしく礼を述べたつもりであったが、青年は小さく首をかしげた。「なんだそりゃ。なんかのまじないか？」

そう言うと、足で焚き火をかき消してしまった。燃えた薪の端に残るかすかな光が、青年の瞳に揺らめいた。彼は目を細め、光から

逃げるように闇に一步下がった。

「悪いな。この火は俺には強すぎる。俺は光が苦手だね」

この暗闇では心もとない小さな小さな光の中で、青年は手際よく兎の血抜きを済ませた。

「爺さんも喰うといい。滅多に來ない客だ。

今日くらい夕食を分けてやるよ」

「それはありがたい」

彼の後ろから、小さな虎がひょっこり顔を出した。彼の髪と同じ、見たこともない白い虎であった。

「これはたまげた……!」

青年は笑った。

「俺の兄弟だからな。少しは似ているだろう？」

冗談を言いながらもみるみるうちに慣れ

た手際で兎の皮は剥がされる。あっという間に、兎は丸裸になってしまった。

青年は腰に下げていた小さな袋から調味料らしき粉をつまみ、いくらかふりかけて弱い火でじっくりと兎の肉を焼いた。芳ばしい香りが胃を縮める。

「さあ、旨い夕食だ。遠慮せず喰えよ」

それだけ老獺に言ってやって、青年は肉にありついた。兎を剥いだナイフで肉を小分けし、そのナイフで肉を刺してかぶりつく。

老獺は二本の棒を取り出して、それで肉を挟んで食べた。すぐに兎一匹は二人の腹の中に収まった。

青年は光を嫌っていた。食事が終わると、早々に火を消してしまふ。

「月明かりで充分だろう」

夜空を見上げた青年の眼差しには月が落



ちている。月光を宿したその瞳は、少し紫がかった薄い灰色だった。癖のある白い髪は、ふわりと夜風に揺れた。長くなった襟足は細く編まれている。

第一章 虎の子

白い髪の間人が時折生まれてくるという話は、今までに聞いたことはあった。彼らは肌も瞳も色が薄く、強い光に耐えられない性質があるという。だから彼も、焚き火を嫌ったのだろう。月の光は無事に見える。獣と共に夜に生きる生活をしているのだろう。

「青年よ。名はなんという？」

月を瞳に映していた彼は、彫りの深い整った顔をこちらに向けた。面立ちは、細い眼の主流な老獺の系統とは違う。眼は大きく開き、

鼻筋は通り、彫は深くまつ毛も長かった。その顔で、青年は笑った。

森羅万象の子

「俺たちに名は無いね。俺達兄弟たちも、他

の生き物もみんなそうだ。俺も、あの虎も、そしてこの小さな虎も、この森の中に埋もれる生き物のうちの一つにすぎない」

「ふむ……」

老獺は、自分と青年の周りでくつろぐ大虎らを見回した。子虎は青年にもらった兎の骨に飽きたのか、すっかり眠っているようだった。

「勘違いしちゃいけない。この森の生き物は俺達だけじゃないんだ。さっきの狼も、兎も鳥も虫も、そしてこの森をつくる木々にも命はある。爺さん、この森の木々にも名前をつけられる自信はあるかい？」

彼の視点は不思議だが、その通りだった。傲慢な人間は、自分がこの世の支配者とも言うように己を中心とする見方をする。しかし人間など森に入れば木々に埋もれ、運が悪け



れば獣らの腹に収まってしまふ。先ほど老獺自身がそうなりかけたように。

この青年は自分を森の一部でしかないと捉えられる、無垢な眼差しで世界を見ていた。老獺は目からうろこの彼の言葉に、深く唸った。

「木々に名か。……難しいことだな」

「だろ？」

青年の微笑は、澄んでいた。その笑顔に見入った老獺に、青年はまた続けた。

「姿もあるし、命もある。だけど名前はない。

俺たちが喰ったあの兎にも、名前はない。兎は兎だ。同じように木は木、狼は狼、兄弟は兄弟、人間は人間ってわけだ。ここじゃ爺さんの名だって何の役にも立たない。だから爺さんも爺さんだ。名前を欲しがるのは人間の不思議な特徴だ」

青年は「どうだい？」と老人を覗いた。

「おもしろい考えだ。私は命あるもの全てに名を求めていたのかもしれない。老いても学ぶべきことは多いようだ。そなたは賢い」

「そりやどうも。通りすがりの爺さんにそんなこと言われたのは、生まれて始めてだな」

同じ色の子虎を、青年は優しく撫でた。子虎は気持ちよさそうに身をよじってみせた。

「しかし青年よ。それでは私はそなたを何と呼べばよいのだ？」

「俺の名が欲しいのか？」

青年は探るように目を動かした。彼の瞳は、何か不思議な力を持っているように見える。吸い込まれそうな、何か大きな力に引き込まれるような錯覚が襲う。

青年は、森の深淵に声を沈めた。

「人間だけだ、名を欲しがるのは。自分を特

別にして、自分と他人の存在を区別したいらしい。同じ平等な命を持っているのに、区別したがるんだよ、人間は」

青年の目に、わずかだが何かを忌むような光が見えた。

「俺はこの姿のせいで森に捨てられ、森に助けられて生きてきた。森や兄弟たちには俺の呼び名なんて必要なかった」

第一章 虎の子  
それから少しの自嘲を含んで青年は目を閉じ、次に開けたときには凜々しい眼差しに戻っていた。

「トゥラスホピネサリア」

青年は面白いものでも見た後のように、老獺にふと笑いかけた。それほど老獺は彼の難解な名に目を剥いていたようだ。

「俺の覚えていない昔に、そういう名をもらったことがあるらしい」

「トゥラスホピネサリア……ずいぶんと意味ありげな立派な名ではないか」

このような立派な名には、少なからず意味はあろう。だがそんなものは知らないとも言うように、彼は肩をほんの少しすくめた。

「トゥラスでいい。昔の名だ。ここでは誰も俺のことをそう呼ばない。そう呼ぶ必要が無いかからだ。でも爺さんだから教えたんだぜ。爺さんの名も教えろよ」

「これはすまない。本来は自らの名を先に言わねばならんというのに」

「気にしねえよ、そんなもん」

「いや、礼儀とは尊いものだ。今わしは悔いている。……わしの名はチュンオウだ」

トゥラスは目をしばたたいて驚いた様子を見せた。

「珍しい名だな」

「ここからずいぶん離れたところからやって来たからな。海も渡ってきた」

「うみ……？」

トゥラスは怪訝な顔で反芻する。

「海を知らんのか？」

「何なんだ、うみって……？」

チュンオウはようやく気づいた。この青年  
トゥラスは森に入ってからそれきりで、彼の  
世界はこの森だけなのだ。世界は全て木々と  
大地から成っていると思っっているのだろう。

「この世界にはな、大陸という広い大地と、  
島という小さい大地があり、それらは海によ  
って隔てられているのだ。海とは神秘的な命  
のゆりかごだ。とても深く、広く、そして塩  
辛い水でできている」

「塩辛い？」

トゥラスは笑った。

「そりやまたなんでだよ。ここらにも川やら  
池やらで水はあるが、塩辛くはないぜ？ 変  
な話だ、そこが生命のゆりかごだなんて。誰  
か塩でもまいたのかい？」

「トゥラスよ、それはまったくあべこべな考  
え方だ。海が我らに塩をもたらすのだよ」

トゥラスはあらゆる疑問の色を瞳に浮か  
び上がらせた。その疑問の一つ一つを紐解く  
ように、チュンオウは老獪の由縁ともなる知  
識をトゥラスに分け与えた。それが、長い年  
月を生きた己の役目の一つだとチュンオウ  
は思った。

「海は私たち人間が生まれる前からあった。  
我々は海から生まれたのだ」

「海から……？」

「海は尊い。大地が父なら海は母か。どのよ  
うに私たち人間が生まれてきたのかは分か

らない。しかし今実際ここにこの体がある。この体は私の両親、両親の両親、そしてずっと同じように祖先をたどっていけばその先には何があるのか……」

「その先……。祖先是、いつかどこかで行き止まる……？」

「私はその先を海だと考える。海は広く深く、私としても豊かな色をしている。その海の風は私の心を清めた。この歳にもなって、母の面影を潮風に見てしまう」

トゥラスはそれに笑って、静かな虎たちを見やった。一番大きな虎が、何かを探るよう  
にじっとチュンオウを見つめている。

「本当に海がずっと昔の母親ならいいのにな」

トゥラスの声は、闇の森に交わるくらいに静かであった。

この青年の生い立ちは、いかなるものか。白い髪、灰の目。その容姿が、災いをもたらす何かと由縁されたのか。だがトゥラスの眼光は確固たる何かを宿しているようだ。灰色の宝石の目は磨けば必ず輝きは増す。森に潜むままで、彼の眼は満足せぬに違いない。それにトゥラス自身が気づいてないとしても。そこを導くのが老獺の役目ではないかとチュンオウは決意した。

「トゥラスよ。そなた、私と一緒に旅をせぬか」

「旅？」

なんと突飛なことを言うのだ。そんな顔でトゥラスは大きなため息をついた。

「俺はこの森でいい。狼とはよく喧嘩はするが、これでもたいていのやつらとは仲よくやってるんだぜ。それに兄弟たちもいるんだ」

「海を見てみたくなはないのか？」  
 それには言葉を飲み込んでしまったよう  
 だ。難しい顔で、チュンオウから視線をそら  
 す。

「そりゃあ……。まあ、見てみたいな」

チュンオウは、深いしわの刻まれた、それ  
 でも凜々しい面を緩ませた。

第一章 虎の子  
 「そなたは賢い青年だ。もっと世界を見る必  
 要がある。世界は森だけではない。木々も無  
 く砂ばかりが広がる大地もあれば、雪かぶる  
 白い山々もあるし、人々が生活を営む街とい  
 うものもある。それらを見て、そなたは多く  
 の知識をつけねばならん」

しばらくトゥラスは視線を地に落とし、悩  
 む様子を見せた。だが短い吐息の後に立ちあ  
 がった。

彼の意思を汲みとってか、虎たちも身を起

こした。眠っていた子虎も、びくりと身体を  
 震わせてから、慌てて飛び起きた。

「兄弟と相談してみる。俺だって、こいつら  
 と別れるのは辛い。こいつらだってきつとそ  
 うだ。俺はこいつらの家族だからな。それに  
 この森は、ずっと俺を守ってくれた」

トゥラスは虎を従え、森の奥へ進んだ。

「ついてこいよ、爺さん。今晚は俺の家に招  
 待するよ。こんなところで寝ていたら、朝に  
 は綺麗に喰われて骨になっているだろうし  
 な」

「それはありがたい」

チュンオウは手早く鍋などを片付けて、ト  
 ウラスの後を追った。

森は獣の刻。見慣れない客に、梟や山猫が  
 好奇心で遠くから覗いている。

「悪いな、俺の客だよ。今晚くらい大目にみ





はいつしか深い眠りについてしまっていた。  
た。

深淵なる森の穴。ぽっかりと月光が注ぎ込む器。生き物たちの命潤す泉。その月光落とす鏡面に唇をつけ喉へ流す。そして顔を上げ、

第一章 虎の子  
鏡の自分になど目を合わすことなく口を拭う。広がっては消えゆく波紋に、白い髪が揺れた。

泉のほitori。振り返れば木々の隙間に岩がある。それほど大きくもない、しかし人が一人で持ちあげるにはてこずるような、そんな岩が積み上がっていた。

森羅万象の子  
トゥラスはそこへ歩み寄り、岩をそっと撫でた。指に触る細いくぼみがある。泉に反射した月光に浮かび上がるそれは、かつて習っ

た文字でアンサリースと書かれてある。数年も前、トゥラスが彫ったものだ。

兄弟らの、時には雷鳴のごとく天を地を震わす声が、優しく喉を転がってトゥラスにすり寄った。兄弟の優しさに笑みを返し、もう一度岩を撫でた。

「ばあさん。……俺はどうするべきだ？」

目じりの皺が紡ぐ、彼女の優しいほほ笑みが脳裏に浮かんだ。血の繋がりはない。だが、この森に捨てられた幼いトゥラスを育ててくれた養母だ。彼女はトゥラスの出生の秘密や森に捨てられた経緯を知っていた。この白い髪と灰の目が悪魔の子だと占われたために、森に捨てられたのだという。

彼女は捨てられた幼いトゥラスと共に森にやってきた。本当の両親のことなどを話さないという約束でここにいるから、そういっ